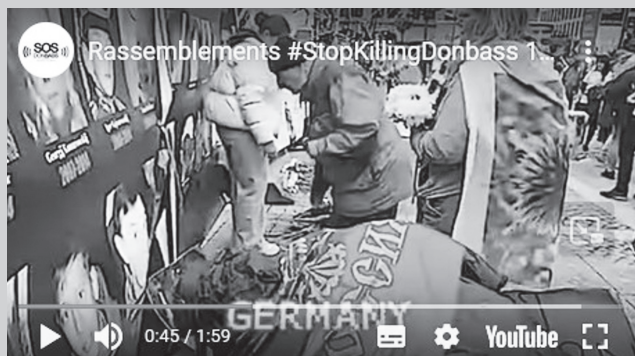


## 第4章

# ゼレンスキーはやっぱりオオカミ少年

—「ロシアのミサイルがポーランドに着弾」  
との嘘でNATOを全面戦争に



EUで大反響を呼んでいる動画(2分弱)

「#StopKillingDonbass ドンバス殺しを止めろ！」

1

やっと「研究所…花だより」を書くゆとりが出てきたと思ったら、またもや「二月一五日、ポーランドにミサイルが着弾して2人が死亡した」という記事がメディアを賑わせました。例によってゼレンスキー大統領は「これはロシアの仕業だ」と言い、「NATOはどこかの国が1国でも攻撃されたら集団的に報復するという条約をもっているのだから、ロシアを攻撃すべきだ」と発言しています。

そこで仕方なく、「やはりウクライナ問題に復帰しなくてはいけないのか」と思い始めました。しかし、今までは「ウクライナ支持、ロシアとプーチンの悪魔化」一辺倒だった世論も、少しずつ変わり始めています。

2

これまでの大手メディアの動きを見ると、ロシア軍が優勢なときにはコロナ騒ぎが新聞やテレビの報道を賑わせ、他方、ロシア軍が劣勢になると報道からコロナ騒ぎが消え、ウクライナ軍の勝利報道ばかりになるというサイクルを描いてきました。

つまり「コロナ騒ぎ」がウクライナ軍の劣勢やウクライナ軍の非道な攻撃ぶりをかき消

す役割を果たしてきたように、私には見えません。

つまり日本のメディアはウクライナ軍の残虐ぶりやゼレンスキー政権の腐敗ぶりを、ほとんど報道したことがないのです。少なくとも私は、そのような報道を眼にしたことはありません。

たとえばロシア軍がヘルソン市から撤退すると、ニュースはウクライナ軍を賞賛する報道一色になり、ひどいメディアは、または「ロシア軍はヘルソン市で市民を拷問していた」という記事を書きたてることになります。

その典型例がBBCです。今やイギリス政府の大本営放送局と化したBBCは次のように報道しています。

\*解放もないヘルソン、拷問の痕ある市民の遺体多数 長期拘束の2人を取材  
<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-63689252>

これは、かつての下記の報道とまったく同じパターンです。

\*ロシア軍のブチャ撤退 → ブチャ虐殺事件

\*ロシア軍のハリコフ撤退 → イジュームの虐殺と集団墓地

\*ロシア軍のヘルソン撤退 → ヘルソン市民への拷問・長期拘束

ブチャにおける虐殺事件も今では嘘であったことが明らかになっています。『ウクライナ問題の正体1』の第13章を参照ください。

イジュームの集団墓地についても、カナダ人の若い女性記者エバ・バートレットの現地取材は全く違った事実を突きつけています。次の最新記事は、彼女が現地取材した動画を元に、改めてそのことを証明しています。

\* Maligned in Western Media, Donbass Forces are Defending Their Future from Ukrainian Shelling and Fascism  
 「西側メディアで悪者にされているドンバス軍は、ウクライナの砲撃とファシズムから自分たちの未来を守っている」  
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1155.html> 【翻訳NEWS】2022/11/29

すでに『正体1・2』で詳しく書きましたが、二〇一四年にウクライナでクーデター政権ができてから、一貫して砲撃・虐殺されてきたのはドンバス地方の住民であり、その死者は1万3000〜4000人にも及んでいるのです。

上記のエバ・バートレット記者の記事は次の三つの節から成っていますが、現地地で戦っているドンバス軍およびドンバス住民に直接取材した映像と生の声から、ドンバスの真の姿を知ることができます。



マリウポリ市に新たな集団虐殺の証拠を発見!と西側メディアは書きたてるが、この墓地にはウクライナ兵でさえ丁寧に埋蔵されている

- (1) ウクライナ東部の前線兵士の声  
(Voices From the Frontlines of Eastern Ukraine)
  - (2) 指揮官が語るウクライナ戦争の地政学的理由  
(Commanders Speak of Geopolitical Reasons for Ukraine's War)
  - (3) 欧米メディアは事実を逆転させ、ナチスを賞賛し、ロシア軍を悪魔化した  
(Western Media Inverted Reality, Lauding Nazis and Demonymizing Defenders)
- この記事は、最後に4つの動画を載せています。いずれも5分前後のもので、ぜひ見ていただきたいと思えます。英語字幕ですが、難しい英語ではないので、停止して読んでいただければ十分に住民の思いが伝わってくると思います。
- この映像をみていただくだけで、これは「集団虐殺」された場所ではなく、ひとりひとりが埋葬された普通の「墓地」で、敵兵にウクライナ軍の兵士でさえ、丁寧に

埋葬され十字架まで立てられていることを自分の眼で確認できます。

4

朝5時に起きて、ここまで書いてきたら疲れたので、日課にしている朝の散歩に出かけました。すると帰り道で、「ヘルソン市の住民がBBCの取材に対して、自分はロシア軍に拷問されたとなぜ言ったのか」の答えが、突然、頭に浮かびました。

散歩をしていると、いろいろな想念が浮かんできます。このときも、BBCの取材に応じたヘルソン市民は偽証をしたのではないかという考えが、突然、浮かんできました。

というのは、ロシア軍がヘルソン州の州都ヘルソン市から撤退したとき、希望する住民11万5000人をすべて引き連れてドニエプル川の東岸に移動・移住しているからです。そして仮の州都をその東岸の地につくりました。

しかも、ヘルソン州は他のザポリージャ州と同じく、住民投票で圧倒的多数が自治・独立とロシアへの編入を希望していました。ですからロシア軍がウクライナ軍の砲撃からヘルソン住民を守ることはあっても、その市民を拉致・拷問することはありません。その理由がないからです。

住民が、100人以上の国際的な監視団に見守られながら、口々に「この日を待ちかねていた」と言いながら住民投票する様子は、エバ・バートレットなど多くの外国人記者が報告記事や動画を寄せています。

そのようすは、『正体3』の第8章「キエフからの激しい攻撃下、恐怖にもめげず住民投票に向かうドンバスの市民」で詳しく述べました。

5

ウクライナ軍がドニエプル川をせき止めてつくったカホフカ・ダムを爆撃し、ヘルソン市に大洪水を起こす作戦が密かに進行しているという情報を入手したロシア軍が、住民と一緒に撤退したことは前述のとおりです。

そのとき私は、ヘルソン市の住民はほぼ全員がロシア軍と一緒に撤退・移住したと思っ込んでいたのですが、BBCのインタビュ記事を読んで、残った市民がいたことを知りました。

確かに調べてみると、次頁のように住民投票で圧倒的多数がロシア編入を希望したとは言え、ヘルソン州は13%が編入に賛成していなかったからです。

ドネツク人民共和国	99・23%
ルガンスク人民共和国	98・42%
ザポリージャ州	93・11%
ヘルソン州	87・05%

ではヘルソン市に残留した市民は、侵攻してきたウクライナ軍にどう対応したでしょうか。私の推測では、彼らはロシア軍を悪魔化することによって自分の命を守ろうとしたのではないかと想像されるのです。

なぜなら、すでにウクライナではロシアと戦うのではなくロシアと友好関係を結ぶべきだと言った市長はすべて暗殺されたり行方不明になっていますし、少しでもロシアに好意を示す一般市民も、その多くが拉致・拷問されているからです。

この「キエフ政権Ⅱアゾフ大隊の残虐ぶり」については、「裏切り者は一人でも減らせ。政敵の暗殺・誘拐・拷問を指揮・監督するゼレンスキー」(『正体2』第3章)で詳述しました。下記URLでは、その凄惨なようすをカラーの画像で、幾つも確認することができます。

<http://tackataka.blog.fc2.com/blog-date-202204.html> (『百々峰だより』2022/04/22)

あとで分かったことですが、ブチャでも基本的には同じでした。





ブチャ虐殺はロシア軍の仕業だとするロイターが公開した写真。しかし殺されていたのは親ロシアを示す白い腕章を巻いた市民であり、ウクライナ軍の仕業であったことを物語っている。白い腕章はロシア軍もつけているが写真左のウクライナ軍にはその腕章がない

ブチャにおける虐殺事件で殺されたひとたちは、ロシア軍が進攻してきたとき敵意を示さず、好意を示したひとたちだったからです。それ以前からキエフ政権は、これまでも住民一人一人のロシアへの好感度をチェックする仕事をしてきましたから、ブチャでその成果が試されたとも言えるわけです。

だとすれば、ヘルソン市に残ろうとしたひとたちが自分の命と生活を守るためにとるべき手段は、自ずと知れたことでしょう。北朝鮮から韓国へと「脱北」したひとたちも、朝鮮を思い切り悪魔化することによって韓国における市民権を獲得したひとが多かったそうです。

百々峰ヒャクカミナの麓かみねへの散歩で思いついたことは以上のとおりです。この「寺島の仮説」が正しかったのか



Во Львові перебрались циганські беженці

Перебрались із Києва, де успішно годили обворочували і грабили людей. Вони намагалися повторити свої «грязні фокуси» і во Львові, а значить, їх прийняли со всіма почестями.

Как думаете, через сколько они снова начнут воровать?



ウクライナ「アゾフ大隊」の残虐ぶり：ウクライナに住む少数民族ロマ人たちを害虫だとして顔に緑色の防腐剤を塗りたくり電柱にくくりつける

どうかは、いずれまた現地取材している記者が教えてくれるだろうと思っています。

5

さて話が少しずれたので、元のポーランドにミサイルが着弾した話題に戻ります。

私は以前にも紹介したように、『正体3』の表紙裏、いわゆる「ソデ(袖)」の箇所には、次のような「宣伝文」を載せておきました。これが「ウクライナ問題の本質」をすべて語っていると考えたからです。

**ゼレンスキー大統領はオオカミ少年だ**

イソップ物語のオオカミ少年は、村人に「オオカミが来た！」と何度も嘘をつき、結局は誰からも信用されなくなりました。ウクライナのゼレンスキー大統領も一種の「オオカミ少年」

です。氏は常識では考えられないような嘘を平気でつき続けているからです。

「ロシアがドンバスの劇場や病院を攻撃した！ 自分が守っている都市なのに？」

「ロシアがザポリージャ原発を攻撃した！ 自分の管理下にある原発なのに？」

「ロシアが海底パイプラインを爆破した！ 自分が巨費を投じて作ったのに？」

本書は、このような「嘘の帝国」と、ゼレンスキー大統領の正体を暴露するものです。

そして同時に、アメリカとNATOに操られて互<sup>あや</sup>礫<sup>がれき</sup>と化すまで戦いを強いられているウクラ  
イナ国民への哀歌<sup>エレジー</sup>です。

NATO加盟国のポーランドにミサイルが着弾したというニュースが流れたとき、ゼレンスキー大統領は、直ぐにビデオ演説で「ロシアのミサイルがポーランドに着弾した」とロシアを非難し、この行為は「緊張を激化させる非常に重大な行為だ。NATOの行動が必要とされている」と訴えました。

このニュースを知ったとき、真っ先に私の頭に浮かんだのは、「やはりゼレンスキー大統領はオオカミ少年だ」という思いでした。なぜならロシアがポーランドをミサイル攻撃をしても得るものはなにひとつないからです。

他方、このニュースでキエフ政権が得るものは多大です。事実、ゼレンスキー大統領は、

前述のとおり、「ポーランドが攻撃されたのだから条約第5条を発動してNATO加盟国はロシア攻撃に乗りだすべきだ」と発言しているからです。

キエフ政権は、ロシア軍がハリコフやヘンソンから撤退しても、そのウクライナ側の勝利は、本書で既に何度も述べているとおり、「ピュロスの勝利」だったからです。

つまりウクライナ軍の得たものは、「犠牲が多くて引き合わない勝利」「損害が大きく、得るものが少ない勝利」に過ぎなかったのです。

## 6

先述のとおり、ゼレンスキー大統領は、次のように、常識では考えられないような嘘を平気でつき続けてきました。

「ロシアがドンバスの劇場や病院を攻撃した！ 自分が守っている都市なのに？」

「ロシアがザポリージャ原発を攻撃した！ 自分の管理下にある原発なのに？」

「ロシアが海底パイプラインを爆破した！ 自分が巨費を投じて作ったのに？」

ですから少しでも判断力があるひとなら、「またか！」と考えたはずなのです。たとえば、

すでに次のような論考が次々と出てきているからです。

\* A False Flag Over Poland? There Was No Missile Malfunction

「ポーランド上空で偽旗作戦… サイルに誤作動などはなかった（スコット・リッター）」

<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1156.html> (『翻訳NEWS』2022/12/03)

\* NATO's Frankenstein Monster... Kiev Regime Exposed in Criminal False-Flag Attack on Poland

「NATOが作り出した怪物フランケンシュタイン……ポーランドへの犯罪的な偽旗攻撃で暴かれたキエフ政権」

<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1158.html> (『翻訳NEWS』2022/12/01)

\* Zelensky, Media Lackeys Caught in Most Dangerous Lie Yet

(ゼレンスキー。手下のメディアは、さらに最も危険な嘘に引っかかっている)

<https://libya360.wordpress.com/2022/11/19/zelensky-media-lackeys-caught-in-most-dangerous-lie-yet/> Nov 19, 2022

7

前述の最初の論考を書いたスコット・リッターは国連の武器査察官として、アメリカのWMD（大量破壊兵器）の嘘を暴いた人物として有名です。

今度の事件は、ウクライナの地对空ミサイルの300がロシアのミサイルを撃ち落とし、その300の一部が誤ってポーランドに落下したというのがゼレンスキー大統領の主張のようだが、そんなことはあり得ないと、リッター氏は述べています。



詳しい説明は省きますが、リッター氏の主張の要点は次のとおりです。

一般的にミサイルは、故障したり、レーダーの追尾を外しても、発射時とほぼ同じ方向に飛行し続ける。この法則から大きく外れると、ミサイルの制御面が故障したり損傷していることになり、一定の軌道を維持できなくなり、制御不能に陥ってしまう。ウクライナのS-300ミサイルがポーランドに到達するためには、空力制御システムが完全に機能することが必要であった。つまり、ミサイルは故障していなかったのだ。

これだけの説明では分かりにくいかも知れませんが、詳しくは原文を読むゆとりがあるひとはそちらを参照してもらおうことにして、私の理解した要点は次のとおりです。

(1) ロシアから来たとされているミサイルは東から西に向かっていたはず。したがって、それを迎撃したウクライナのミサイルS-300は西から東の方向に撃たれたはずだ。



ポーランドとウクライナ国境

(2) このS-300がロシアのミサイルを撃ち落とし、ポーランドに落下したとすれば、撃ち落とした後、ミサイルが故障し方向が逆転して、ポーランドに向かわなくてはならない。

(3) しかし「一般的にミサイルは、故障したり、レーダーの追尾を外しても、発射時とほぼ同じ方向に飛行し続ける」。

(4) つまりロシアのミサイルを迎撃したS-300が、方向を変えてポーランド(プシェボドフ市)に着弾することはあり得ない。

(5) したがって、ポーランドに着弾したウクライナの迎撃ミサイルは初めからポーランドの方向に向かって発射されたもので、故障もしていなかった。故障した迎撃ミサイルであれば、ロシアのミサイルを撃ち落とせなかったはずだし、ポーランドに到達することもできなかつたはずだからだ。

8

要するにスコット・リッターが言いたかったことは、ウクライナ

軍が意図的にポーランドの方向に迎撃ミサイルを発射して「ロシア軍による攻撃だ」と嘘をついているということです。

そうすればNATOをロシアとの戦争に引きずり込むことができからです。なぜなら、NATO条約第5条は「NATO加盟国のひとつに対する攻撃は全加盟国に対する攻撃と見なす」としているからです。

キエフ政権が、このような嘘に頼らざるを得なくなっただのは、これまでにウクライナ軍が勝利したと称するものは「ピユロスの勝利」だったからでしょう。ですから、ゼレンスキー大統領にとっては次の手が思いつきません。

なにしろ、今までキエフ政権を支持してきたはずのアメリカですら、アメリカ統合参謀本部のマーク・ミリー将軍が一月九日、「ウクライナ軍がロシア軍に勝利することはないかもしれない」とニューヨークの経済クラブで発言しているからです。

そして「冬が本格化する前にロシアとの交渉を始めるべきだ」と主張すらしていたので、次はそのことを伝える政治紙POLITICO(11/14/2022)に載った記事です。

\* U.S. scrambles to reassure Ukraine after Milley comments on negotiations (米国は、交渉に関するミリー将軍のコメントを受けて、ウクライナを安心させようと躍起になっている)



<https://www.politico.com/news/2022/11/14/us-ukraine-milley-negotiations-00066777>

ましてEU諸国では、ロシアへの経済制裁が「ブーメラン効果」をもたらし、今年の冬ですら、まともに越せるかどうかを危ぶんだ庶民が、EU諸国で「ロシアへの経済制裁をやめる、ウクライナへの援助を止めろ」と、大きな声をあげ始めています。

ですから、このような事態を乗り切るためにキエフ政権が必死に次の策を模索したであろうことは、想像に難くありません。そして考え出されたのがNATO軍を戦場に駆り出すという案だったのでしよう。

しかし、このような案は「ゼレンスキー大統領はオオカミ少年だ」という確信をいっそう世界に広めることになったのではないのでしょうか。その証拠に、次の記事とそれに付けられた動画が、世界のあちこちで大きな反響を呼んでいるからです。これはEUを席巻し始めた反戦の声、民衆の動きを生き生きと伝えています。

\* StopKillingDonbass Draws the World's Attention to the Crimes of the Ukrainian Army (「ドンバス殺しを止める」という動画が、ウクライナ軍の犯罪に、世界の注目を集めている)

<https://ibya360.wordpress.com/2022/11/20/stop-killing-donbass-draws-the-worlds-attention-to-the-crimes-of-the-ukrainian-army/> November 20, 2022

しかも、ゼレンスキーにとって具合の悪いことに、今までゼレンスキーを全面的に支持してきたはずのバイデン大統領でさえ、ポーランドに落下したミサイルはロシアのミサイルとは考えられないと発言し始めています。

アメリカの中間選挙をたたかうなかで、バイデン大統領の外交政策があまりにも評判が悪かったからかも知れません。

それどころかバイデン大統領は、東欧諸国に「調査が済むまではポーランド問題に対する言動を控えろ」と警告すらしているのです。次の記事は、そのような動きを政治紙 POLITICO が伝えたものです。

\* US warns allies over Poland missile incident - Politico

「米国は同盟国にポーランドのミサイル事故について警告—ポリテッコ紙の報道」  
<http://mmethodblog.fc2.com/blog-entry-1153.html> (【翻訳NEWS】2022/11/27)

これは驚くべき変化です。ホワイトハウスもゼレンスキーに見切りをつけ始めているのかも知れません。というのは、アメリカやEU諸国に対するゼレンスキー大統領の「無心」の仕方が、あまりにも傲慢で際限がなくなってきたからです。

そのせいでしょいか、次のCNNニュースは、アメリカの武器庫すら底をつき始めています。この記事の副題「国防総省は、砲弾のほか、防空ミサイルや対戦車ミサイルの備蓄を懸念している」が象徴的です。

\* US running low on arms to give to Ukraine - CNN 「米国はウクライナへの武器提供が枯渇（CNNの報道）」  
<http://mmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1150.html>（翻訳NEWS】2022/11/27）

しかし、そのような傲慢な態度、「もつと金をよこせ」「もつと武器を送れ」という言動をしても恥じない人間を育てたのは、そもそもイギリスやアメリカなのですから、これも、もうひとつの「ブーメラン効果」かもしれません。

というのは、ゼレンスキーが「資力も兵力もないから、これ以上は戦えない」と言つてロシアとの和平交渉に乗りだそうとするたびに、英国からジョンソン首相、米国からブリンケン国務長官やペロシ下院議長などが駆けつけてきて、「資金も武器も援助するから和平交渉に応じるな」と釘を刺してきたのですから。

これでは、「ウクライナ国民は自分たちの命を犠牲にして、ロシアを相手にアメリカの代理戦争を戦っているのだから、これくらい要求しても当然ではないか」とゼレンスキー

が思い始めても、ある意味では当然だとも思われるからです。

10

とはいえ不幸なのは、やはりウクライナ国民であり、ロシアへの経済制裁に対する反動で、経済も崩壊ししつつかあるEU諸国の民衆でしょう。

プーチン大統領領がゼレンスキーにくら和平交渉を呼びかけても、戻ってきた答えは、ザポリージャ原発への砲撃だったり、クリミア大橋の爆破だったり、天然ガスのパイプライン「ノルドストリーム1・2」の破壊工作だったりするわけですから、ついに堪忍袋の緒が切れて、ウクライナ全土へのミサイル攻撃を始めました。

しかしウクライナ軍と違って、攻撃対象は民家・学校・劇場・市場ではなく、主として電力網を切断することでした。ですから発電所は一切、攻撃対象になっていません。それでもウクライナ国民は、暗闇の日常生活を強いられています。暖房設備も動きません。これはドンバスの住民が8年以上にもわたって強いられてきたのと同じ生活です。

とはいえ、ウクライナの南東部ドンバスに住むロシア語話者は、住居や市場すら毎日のように爆撃されて地下生活やテント生活を強いられてきたのですから、それと比べればキ



暗闇に包まれるキエフ、頼るのは自動車のヘッドライトだけ  
<https://www.rt.com/russia/566850-power-boss-urges-ukrainians-leave-country/>

エフ政権の支配地域に住む住民は、はるかに快適な生活だとも言えるでしょう。

ところが驚いたことに、ウクライナ最大の電力会社はウクライナ国民に、冬場の3〜4カ月だけでも国外に移住してくれと呼びかけたのです。次の記事を見てください。

\* Power boss urges Ukrainians to leave the country

「電力会社の幹部がウクライナ国民に国外移住を要請」  
<http://innethodhogfc2.com/blog-entry-1151.html> (翻訳 NEWSJ 2022/11/27)

この記事の副題は次のようになっていましたから、ウクライナがこれから迎えようとしている事態の深刻さが分かるはずです。なにしろ、これからは厳寒の冬が襲ってくるのに、暖房はほとんど使えなくなる可能性があるからです。

\* Moving abroad for “another three or four months” would help the energy system amid Russian attacks, DTEK CEO

Maksim Timchenko says (「この先、3〜4カ月」外国に移住してくれば、ロシアによる攻撃が続く中、エネルギー体系維持の助けになる、とDTEK社のマクシム・ティムシエンコ代表取締役は語る)

11

しかし、これは笑止の事態とも言えます。というのは、ゼレンスキー大統領は、兵力を獲得するため国民の外国移住を厳しく禁じてきたからです。

プーチン大統領が「部分的動員令」に署名し、新しい兵力を補充しようとしたとき、ロシア国民の一部は国外脱出しましたが、政府はそれを厳しく取り締まったり罰したりすることはしませんでした。

ところがキエフ政権は国外脱出を厳しく取り締まっただけでなく、刑務所に入っている極悪人さえも釈放して軍に動員するということすらおこないました。『正体3』(168・171頁)では、「トルネード大隊」を例にして、そのことを詳しく説明しました。

\* Ukraine replenishes combat losses with convicts and women

「ウクライナは兵士を女性や受刑者たちから補填<sup>ほくけん</sup>」

<http://rmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-970.html> (『翻訳NEWS』2022/07/07)

\* These are animals, not people”: Zelensky frees convicted child rapists, torturers to reinforce depleted military

「泣く子も黙る」と言われた「アゾフ大隊」ですら顔負けの、  
犯罪集団「トルネード大隊」



「こいつらはケダモノだ、人間じゃない!! ゼレンスキーは、刑務所にいた児童レイプ犯・拷問犯を解放し、枯渴した軍隊を補強する」  
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1005.html> (翻訳 NEWSJ 2022/09/01)

しかし、このような笑止な事態を招いたのはゼレンスキー大統領が、自分の保身を最優先にしたからに他なりません。そしてついにWHOすら次のような予測を出すようになりました。

\* At least two million Ukrainians will migrate in winter - WHO  
「少なくとも200万人のウクライナ人が冬に移住することになる」とWHO」  
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1152.html> (翻訳 NEWSJ 2022/11/27)

しかし、この記事の次の副題が示すように、WHOの高官が心配しているのは「ウクライナ人の精神的健康」であって、これまで8年以上にもわたって砲撃を受けて地下生活を強いられてきた「ドンバス住民」「ロシア語話者」ではないのです。

\* The ongoing conflict is also taking a heavy toll on the mental health of Ukrainians, a senior WHO official says  
「現在進行中の紛争は、ウクライナの市民たちの精神健康面にも害を与えている」とWHO高官は語る」

これほどあからさまな倫理観の欠如、ロシア語話者への蔑視は、空いた口が塞がりません。WHOはウクライナ人の健康だけを心配する国際機関だったのでしょいか。

しかし逆に、このような機関だったからこそ、「新型コロナウイルス」を理由に安全性が保証されていない遺伝子組み換えワクチンを世界中に強制し、たくさんの死者・被害者を出してきたのだと思えば、納得できないこともありません。

それはともかく、このような事態を前にして、『櫻井ジャーナル』(2022/1/21)は次のような予測を立てています。

ロシア軍はウクライナにおける新たな軍事作戦の準備を整え、ステップ(大草原)の地面が凍結



して木々の葉が落ちるのを待っている。

すでにT-90M戦車や防空システムS-400を含む兵器がドンバス周辺へ運ばれ、部分的動員で集められた兵士のうち約8万人はすでにドンバス入りし、そのうち5万人は戦闘に参加、訓練中の約32万人も新作戦が始まる前には合流するはずだ。

すでに45歳以上の男性を戦場に投入しているウオロディミル・ゼレンスキー政権は追い詰められているが、それだけでなく、ロシア軍が新たな軍事作戦を始めるとウクライナ軍の敗北を隠しようがなくなり、これまで戦争拡大を目論んできたネオコンなどアメリカ／NATOの好戦派は厳しい状況に陥る可能性が高い。

考えてみれば、ロシア侵略をめざしたナポレオンも、裏で英米勢力に支援されてソ連征服をめざしたヒトラーも、厳しい冬將軍のなかで敗北しました。今度のウクライナ紛争も、裏で英米が仕組んだ代理戦争だったわけですが、ゼレンスキーもナポレオンやヒトラーと同じ道をたどるかもしれません。

右の『櫻井ジャーナル』の予測が正しく、その結果、ドンバスの地に一刻も早く平和が戻ってくることを願ってやみません。

〈本章のキーワード〉

迎撃ミサイルS-300

「ビュロスの勝利」「トルネード大隊」

ブチャにおける虐殺事件、イジュームで集団殺戮・集団墓地

エバ・バートレット記者、スコット・リッター（元国際兵器査察官）

ナポレオン → ヒトラー → ゼレンスキー ← 冬將軍